表象のグローバル化をみる

齋藤 晃
国立民族学博物館助教授

人類学者がこれまで研究対象としてきた諸社会が、近年、加速度的な変化の過程にあること、そしてその変化の方向性が、人類学の学問的基盤を根底から揺るがすものであることは、もはや言を待たない。現在、人類学が直面している困難には、さまざまな要因がからんでいるが、この小論ではそのうちのひとつ、「表象(representation)」のグローバル化という要因を考察してみたい。

表象のテクノロジー

印をつける、絵を描く、文字を書く、像を彫る、写真を撮る、音を録るなど、特定の対象を身体外的な媒体を介して再現することを、本論では「表象する(represent)」とよぶ。その活動を支えるテクノロジーは、今日、急速に進歩している。高度に発達した科学技術により、一度に表象化しうる情報の量と質は、飛躍的に向上しつつある。表象の大量複製はいよいよ容易になり、それらを瞬時に世界中にばらまくことも、インターネットの普及によって、だれにでも開かれた可能性となった。

人類学者がこれまで研究してきたのは、日常生活で必要な知識の大部分が身体化された社会である。そこで、「実践(practice)」の多くが表象の助けを借りず、「暗黙知(tacit knowledge)」によって導かれている。実践とは、人間の身体的な活動の総体であり、その大部分がルーティン化しており、当事者によってなかば無反省的に、しかし効率よく遂行される。実践を導く暗黙知とは、身体的に修得されたノウハウであり、反省的省察によって客体化し、言語化することは困難である。にもかかわらず、特定のタスクを首尾よく成しとげることを可能にしてくれる。

しかし現在、表象のグローバル化によって、純粋に暗黙知のみにもとづく実践は減少し、特殊化しつつある。表象が介入する領域が拡大し、これまで全面的に身体に委ねられていたタスクが、表象の媒介によって遂行されている。たとえば、対面状況下、口頭で伝達された情報が、手紙や電話、電子メールを介して伝達される。二者間の信頼関係に依存していた商取引が、契約書を介して結ばれる。記憶のなかに蓄えられた物語が、テープに録音され、書物に著されて、世代から世代へ受けつがれる、など。

南米アンデスの先住民が計算記録用具として使用した結縄。キープとよばれる。1本の太い主縄に数十本から数百本の細い補助縄を結びつけ、補助縄の特定の位置にいくつかの結び目を作って数を表した。結び目の位置は十進法の位を表し、結び目の種類は1から9までの数字を表す。補助縄は色分けされ、数字が意味するものの種類が示された。インカ帝国時代、首都クスコにはキープの保管所があり、そこではキープ・カマヨックとよばれる専門家が統計資料の作成、保管、解読に従事した。帝国各地の人口、賦役の人数、家畜の頭数、貢納品の量、軍隊の兵力、貯蔵庫に蓄えられた物資の量、鉱山から産出される鉱物の量など、彼らは帝国の運営に必要なさまざまな統計記録を管理していた（国立民族学博物館蔵：複製）。

表象が繁茂する時代

表象とはつまるところ何なのだろうか。表象する行為を意味する「リプリゼント」の「リ」は、表象の概念にとって本質的である。それは「現前(presence)」そのものではなく、その「再＝現前(re-presentation)」なのである。それゆえ、表象を定義するなら、身体的な活動である実践、およびその実践を導く身体化された知識である暗黙知を、記号の象徴作用によって客体化し、身体に外在する支持体に具象化したもの、といえる。

再現前としての表象は、現前につきまとう身体的拘束から解き放たれて、時空間を比較的自由に移動するようになる。その結果、特定の表象が時代をこえ、国境をこえてグローバル化し、ローカルな実践を画一化するという現象が生じる。

フィールドワークを方法の根幹にすえる人類学者は、徒弟制にも似た身体的修練を通じて、現地の人びとの実践を把握しようとしてきた。書物を読む、写真を見るなどの代替手段では得られないもの、実際に体験しなければわからないものがあるという信念のもと、人類学者は長期間フィールドに張りついてきた。デリダのいう「現前の形而上学(métaphysique de la présence)」、すなわち、真なるものは表象による媒介・代替を経る以前の純粋な状態で、それ自体として存在するという考えこそ、フィールドワーカーの基本理念だった。

しかし今日、人類学者がフィールドで目にするのは、グローバル化した表象の繁茂である。そこでは、国民は想像され、民族は発明され、歴史は創作され、伝統は創出され、文化は操作され、慣習は演出される。実践はといえば、表象化を免れたものを見つけるためには、重箱の隅をつつくような努力が必要である。

ペルーのクスコ南東のアンダワイリーリャスの聖堂壁画。1626〜28年ごろ、リマ生まれの画家ルイス・デ・リアニョが制作した。正面入り口の左右に天国への道と地獄への道（写真）が描かれている。絵のなかの主要場面にアルファベット記号が付され、解説文が添えられている。

表象化のプロセスを考える

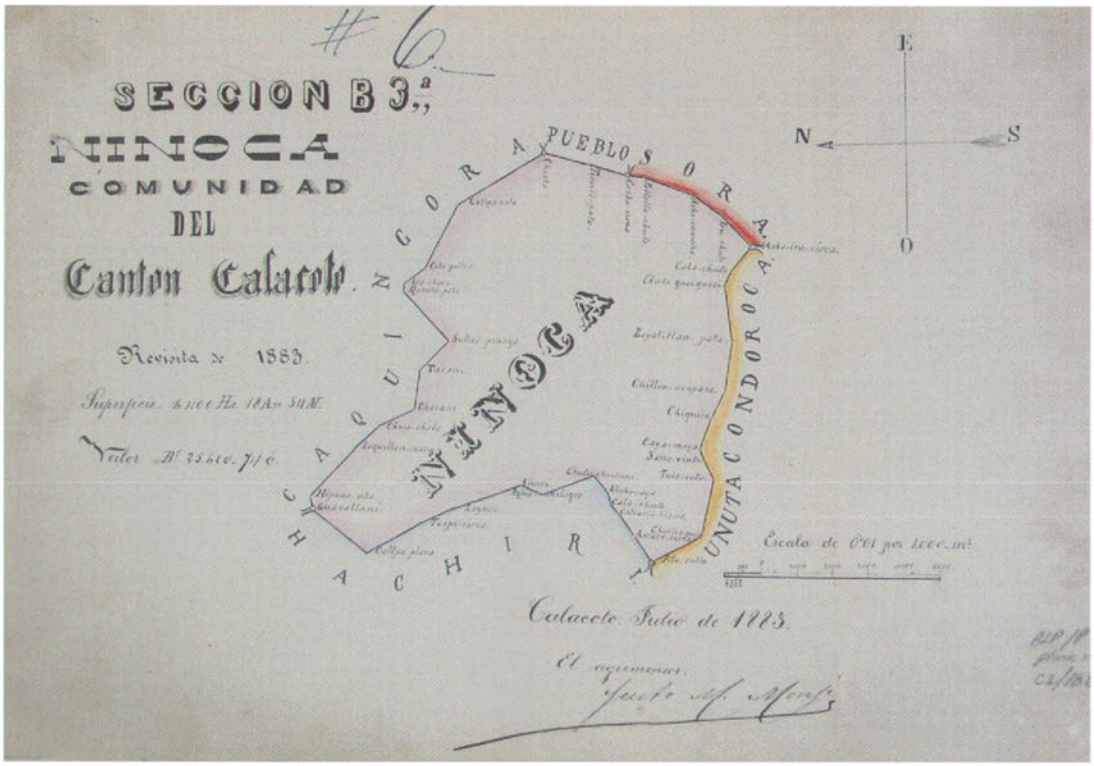
もっとも、現前の形而上学から身を引き離せば、再現前が繁茂するフィールドの今日的状況は、それなりに興味深く映る。実際、表象的代替のプロセスは、それ自体として真剣な検討に値する。関連する一群の問いがすぐに念頭に浮かぶだろう。いわく、人間の身体的な実践が人工的な記号を媒介として表象化されるとき、何がおきるのか。実践を導く暗黙知が、外在的な表象によって客体化され、明示的な規則へ抽象化されたとき、それはどう変化するのか。表象のテクノロジーが進歩するにつれて、人間の認識と行動はどのような影響をこうむり、社会関係はどう変化するのか。表象はいかなる条件のもとで「物神（fetish）」に転化するのか。そしてその社会的帰結は何か、など。

研究対象となるのは、身体に外在する支持体に具象化された表象と、それを操作する技法、そして表象が生産され、流通し、保管され、閲覧され、消費される様式である。具体的には、文字文書（手書き文書、印刷本、デジタルファイルなど）、非文字文書（絵文書、結縄など）、数字と数式、表とグラフ、図像と立像、地図、写真、音声録音、映像録画、そしてそれらを管理する図書館・文書館などである。

表象の身体に対する外在性は、その本質的特徴のひとつである。脱身体化され、支持体に具象化された表象は、身体的制約を免れており、そのぶんだけ操作性にすぐれている。情報の永続的保存や、その迅速かつ広範囲な普及、高次元の反省的省察など、表象は人間が身体をこえて知的活動を展開するためのテクノロジーである。

道具としての表象は、その性質上、効率性を追究する。実際、種類の異なる複数の表象は、特定のタスクに関して効率性の観点から序列化することができる。それゆえ、限定的ではあるが、表象の技術的進歩について論じることも可能である。このような道具的進歩が、人間の認識と行動にどのような作用をおよぼすかを見きわめることは、たいへん興味深い。

また、表象の外在性はその物神化の前提条件でもある。物神化とは、マルクスの言葉を借りれば、「人間の頭の産物が、それ自身の生命をあたえられて、それら自身のあいだでも人間とのあいだでも関係を結ぶ独立した姿に見える」（『資本論



ボリビアでは19世紀末、先住民共同体の土地を私有化する目的で農地改革が実施された。土地巡察に際して、測量技師が農地の面積と評価額を記載した地図を作製し、その複写が1部、先住民にも渡された。以後、地図という表象を介した空間認識が、従来の身体的実践に基づく認識と交差することになる（ラパス歴史文書館蔵）。

(1)』、大月書店、1972、p.136）事態をさす。実際、表象は特定の社会的条件のもと、その母胎である実践から独立した存在様態をおびる。そして実践を上まわる真正性を獲得し、それを従属させ、規格化する。表象はたしかに人間の道具だが、人間を道具化しもするのである。

このような物神化のプロセス、および物神化した表象がおびる真正性のありかたは、地域的・時代的にさまざまである。それらを通文化的に比較することは、実り多いと思われる。

ラテンアメリカ先住民の場合

具体的な研究課題としては、どのようなものがありうるだろうか。私はラテンアメリカを専門とするが、数年来、ヨーロッパ諸国による植民地化の過程における文字文書と図像の使用に関する研究に従事している。新大陸の植民地化は、先住民がこれまでとは規模においても、様式においても異なる表象化を経験する過程であった。ヨーロッパ人は活版印刷や透視図法など、新たな表象のテクノロジーをもちこみ、先住民の社会と文化を根底から変革しようとした。

この表象化＝植民地化の試みは、その主要部分が教会・修道会によるキリスト教布教の一環として推進された。宣教師は、先住民教区の学校で子どもたちに教義を教えるとともに、アルファベットの読み書きを学ばせた。また彼らは、聖堂の内部を額絵や壁画でおおいつくし、イメージの感覚的効果を通じて、教区民を信仰へ導こうとした。

私のおもなフィールドはボリビア東部モホス地方だが、そこでは宣教師の主導によって形成された文字文化が、今日に至るまで維持されている。私の手もとには、18世紀はじめから現在まで、宣教師もしくは先住民によって作成された宗教文書（説教、祈祷、聖歌、公教要理、秘蹟授与の手引きなど）の複写が保管されている。それらの分析を通じて、先住民と文字文書のかかわりかた、およびそれと相関した宗教的実践のありかたを、長期的な視野のもとに解明することができる。

図像に関しては、私が参加する科研費によるプロジェクトチーム（代表：岡田裕成）が、ペルー、ボリビア、パラグアイ、アルゼンチンに現存する植民地時代の聖堂の美術装飾の写真資料を体系的に作成し、データベース化している。現在、私はそれらの写真資料と同時代の文書記録をあわせて検討し、植民地状況下の視覚文化の形成と変容のプロセスを究明している。

齋藤　晃（さいとう・あきら）
専門は歴史人類学。現在の研究テーマは、植民地時代ラテンアメリカにおけるキリスト教の布教と先住民社会の変容。「新大陸の征服」は、ヨーロッパが数世紀にわたって築きあげてきた社会制度、経済機構、表象技術、価値観念の真正性と有効性が、根底から問い直された世界史上希有のできごとである。「近代」の終焉が叫ばれる今、その過去から学べることは少なくない。